

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです
指示された以上のことができる人 “のびしろ”がある社員、ない社員

この章の冒頭で、仕事における「重要度」と「緊急度」の話をしました。「緊急度」のみをキーとした、デイリーワークを追いかけて忙しくしている人であれば、何かしらの指示が上から出たとしても、それに対応する時間も余裕もないでしょう。ギリギリの状態ですら「デッドライン」までに仕事を終わらせることはできても、それ以上のことはできません。ここでいう「ギリギリの状態」とは、仕事の内容についての意味です。仕事として合格ラインのギリギリまでは達成できても、それ以上のレベルまで洗練させる暇はないということです。もう少し練りたいと思えば残業を増やすかどうかという話になってくるでしょう。結局いつまで経っても仕事は終わらず、徒労感だけが重なってしまいます。仕事とは不思議なもので、一定量の仕事があれば、それだけで忙しくなってしまいます。その様子を見ている周りの人も「あの人は忙しそうだ」と思いますし、自分自身もそう思い込んでしまうのです。

一方で、人には誰でも「いい仕事をしたい」という願望が常にあります。ですから、その一定量の仕事についてレベルを高めようとします。時間をかけることも厭いません。残業したり、何日もその仕事にかかりきりになったりするわけです。しかし、たとえば締め切りの一週間前から仕事に取りかかっても、関係する資料を手当たり次第に集め「これもいい」「あれも重要だ」と関連資料を選び出す作業に時間を取られてしまえば、最終的にまとめる段階になったら時間がなくなって資料を見る暇がなくなったり、情報が多すぎてまとめきれなくなったり、といったような事態にもなりかねません。結局、デッドラインがきてしまい、だいたいのところで終わらせるしかないこともあります。とても忙しくしていたのに、フタを開けてみれば、結果にはつながらないのです。物事は時間をかければかけた分だけ完成度が上がると考える人もいますが、それは違います。丁寧に仕事することはとても貴重ですが、実際のところ時間をかけようがかけまいが、日付と時間のデッドラインをきちんと決めて仕事をしていけば、最終的な仕事の出来には大差ないということがほとんどです。時間よりも「締め切り効果」の持つ集中度のほうが重要であるということです。これは私の経験から確信を持っていえます。

ギリギリの状態ですら仕事をしているうちは「仕事量×質」の絶対量は上がりません。そうすると「体力×気力」も大きく関わってくるからです。指示された仕事も満足にいかないのですから、当然、指示された以上のことまで手が回りません。だから評価もされないのです。いい換えると、「指示された以上のこと」ができる人というのは、「指示された通りのこと」を完成させたうえで、もうワンステップ上のことができる人なのです。常に指示された以上のことができる余力があるのが、“のびしろ”がある人であり、成長できる社員であるといえます

カッコ内を埋めてください

ギリギリの状態ですら仕事をしているうちは（ ）の絶対量は上がりません。そうすると

（ ）も大きく関わってくるからです。

常に指示された以上のことができる余力があるのが、“のびしろ”がある人は、どんな社員と言っていますか？

（ ）